**「三世代平等長寿社会」**

**１　だれが「平等」を体現するか**（序論）

改元の初年をつつがなく過ごしおえて、新たな年を迎えているみなさんのこの一年に期待して訴えます。とくに高齢期にいると自覚しているみなさんに。

こと改まって訴えるのは「三世代平等長寿社会」の創出についてです。

ここで「三世代」というのは、「青少年世代（成長期）」「中年世代（成熟期）」「高年世代（円熟期）」を指しています。あいまいな言い方のようですが、だれもが自分が人生の三期のどこに属しているかは実感としてわかるもの。身近でわかりやすい例としては、孫・子・自分の三代のそれでしょうか。長寿の時代ですから孫・子・自分・親という「四世代平等長寿社会」を想定する人もあって、このほうが問題意識がよりはっきりしていてタイトルとしても刺激的かもしれません。

たとえば七〇歳の「古希」を迎える“ぶらさがり団塊”のＡさん（一九五〇年・昭和二五年生まれ）は、敗戦の戦禍の残るさなか自分を産み育ててくれた九四歳の母（一九二六年・昭和元年生まれ）が健在でおり、団塊ジュニアとともに就職氷河期をかいくぐってきた四五歳の子ども（一九七五年・昭和五〇年生まれ）がおり、これから二一世紀を生きぬく二〇歳の孫（二〇〇〇年・平成一二年生まれ）がいるという四世代同居の一家です。「わたる世間・・」ふうのドラマができそうな家族です。

とはいえ目下の主要な課題は「三世代平等長寿社会」の達成にあります。「三世代が平等である社会」を、「高齢化」が進行し高齢者が増えている時に合わせて、みんなでそれぞれの家庭と周りの生活圏で達成する。それによってゆくゆくは同時代をともに生きるだれもが安心して暮らせる生活環境を整えようというのが、この表題の趣意ということになります。とくに高齢期を自覚している人には現実に動いている「平等でない社会」の存在が意識されているのでは。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

**「社会の高齢化」が遅延**

これまでは「人生六五年」、これからは「人生一〇〇年」というのは、いずれも世にいう人生の到達目標に対する政府の見解です。両者のあいだには明らかな意識の転回がありますから、それに対応しながら本論考の筋書きのほうに視点を動かしてみると、

「二世代（二〇＋四〇）＋α」型から「三世代（三〇＋三〇＋三〇）＋α」型へ

という一気の転回になります。

世代の年数は基準値ですからご自分の実情に合わせて足し引きすればいいでしょう。ただし六五歳から一〇〇歳へと一気に跳んでしまった原因は、新世紀二〇年のあいだの政策不履行の連鎖にあったことは肝に銘じておいてください。

世にいう「お年寄り」というのは七〇歳からのようですが、七〇歳については、遠く一二五〇年前に五八歳で去世した唐の詩人杜甫が詠んだ「人生七十古来稀なり」（曲江）から七〇歳が「古希」と呼ばれて、長いあいだ賀寿のひとつとされてきました。

が、いまやだれもが「古希」にたどり着ける「長寿（高齢化）の時代」であることは、スーパーの売り場を眺めても実証されます。課題はそれに見合ったさまざまな場での変容が追いついていないことにあるのです。「人生一〇〇年」で見えてきたことは、より現実的な「七十古希」のみなさんの暮らしに見合う「社会の高齢化」の遅延です。

**２　「余生」を安眠して暮らせるか**（経済）

令和（後平成）二年には、一九五〇年・昭和二五年生まれのみなさんが七〇歳の「古希」に、そして終戦の一九四五年・昭和二〇年生まれのみなさんが七五歳の「後期高齢者」に到達します。その間の「団塊世代」を含む戦後生まれのほぼ一〇〇〇万人の人びとが、稀れどころかみんな「丈夫で長持ち」で品質の優れた“made in japan”の日用品よろしく元気に暮らしているのです。

それぞれが”自己実現“のために日また一日を工夫して多様多彩な人生を送っている「平和団塊」のみなさんです。「一億総動員」した戦争が終わって、「安眠」ができるようになった「平和」の時代に生まれて七〇年余を生きてきた証しとして。

　本来なら、いま日々を過ごしている地域の生活圏で、長年かけて培ってきて今でもたいせつに保っている知識や技術や人脈や資産などを活かして、高齢期の生活感性にふさわしい新たなモノ（サービスも）を製品としてつくり、商品として流通させ、家庭にはいって生活用品として利用しているはずでした。

そういうモノの変容があってはじめて高齢期のみんなの暮らしを豊かにすることができるからです。ところが日本の一国先進国化にアジア諸国が追随して、途上国の日本化とともに日本の途上国化が「グローバル化経済」のアジアでの潮流となり、心地よい国産・地産製品が息づく和風のわが家とはならずに、いわゆる「百均商品」に囲まれた家庭内途上国化が割って入ったのでした。

何もなかった敗戦後や復興期の暮らしを知る者としては、遅れて豊かになろうとしている途上国産のやや粗雑な製品に不満はいえませんが、日本ではひととき、品質の確かな国産・地産品に囲まれて、歴史の上で理想とされる「大同社会」の姿である「夜、戸を閉じず」のままでセキュリティなど気にせずに「安眠」できた「一億総中流」の時期を体験しているのです。

その故あって、高齢者は敗戦後の社会を復興・発展させた功労者として、みんなの善意によって分け隔てなく“被扶養者”として温存されてきたのでした。今も高齢者はだれもが労苦しないですむ「余生」が約束されていると信じて暮らしているのです。ところが新世紀一九年にして、二〇〇〇万円もの生涯生活費の不足が他ならぬ財務省から漏れて出てきているのです。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

**一品三種の国産・地産品づくり**

　高齢者の暮らしを豊かにするモノの「高齢化変容」である国産・地産製品。品質のいい“made in japan”製品は復活・再生はできるのでしょうか。

「失われなかった二〇年」――高齢者が年々増えつづけて高齢化率二五％（二〇一五年）に達して「高年世代」が形成されたこの期間に、高齢者となった人びとによって、みずからの生活感性にふさわしい新たなモノやサービスが各地域・各分野で創出できていれば、だれもが肌ざわりのいい良質な国産・地産品に取り囲まれて過ごし、後人や外国人にうらやましがられて、活き活きとエイジング期を過ごすことができていたはずでした。

繰り返しは老齢特性ですから何度もいいますが、新世紀に入って増えつづけた「支える側の高齢者」の人生を軽視してきた政治リーダー。その失政の連鎖が原因なのです。こう指摘してもご自分の責任だと言う政治家はおそらくいないでしょう。こちらから名指しはできますが。

　そんな失政の犯人探しよりいま有効なのは、意識した高齢者の一人ひとりが、あたかも泉眼のようにこんこんと内発する発想をたいせつにすること。

　職種にもよりますが、可能な企業なら高年社員と社友が協力して、既存の自社ブランドのノウハウを活かして新たな高年用の製品を発想・工夫して製品化すること。既存の青少年（成長期）用、中年者（一般）用に合わせて高年者（円熟期）用を加えて三世代用の“一品三種”（女性対応があれば四種）の製品化を実現することにあります。

「これはパパの、これはママの、これはわたくしの、これはＢちゃんの」という家庭内用品のファミリー・コーディネートが主要テーマです。

　これまでは途上国とも競い合う若者や女性の「成長力」による“経済成長”でしたが、先進高齢化国ではそれにプラスして、高齢者の「成熟＋円熟力」を活かした良質な国産・地産品による“経済伸長”（成長というとまぎらわしい）をどういうふうに展開するかが、企業の実情に合わせた急務となってくるのです。これも日本が最初の試行国となるでしょう。将来の輸出品づくりです。

「高齢者向けモノとサービスをつくる」ことは、足下から内需を安定させ拡大させて経済を持続可能（サステナビリティ）にする枢要なエンジンの働きです。実現者はいうまでもなく、自立し参加し自己実現しようとする高齢者のみなさんです。

この課題の解決の成果は日本オリジナルであるとともに、国際的に先行する成功事例として「高齢化途上国」が次々に追随してくるにちがいありません。

**３　国連の「高齢者五原則」が指針**（国際）

両世紀をまたぐころには世紀の幅でいろいろな議論がなされました。

そのとき国連は、二一世紀の潮流として国際平和を保ちながら迎える「高齢化」を見通して、一九九九年を「国際高齢者年」（International Year of Older Persons）とし、一〇月一日を「国際高齢者デー」と定めて、高齢者が自立して「すべての世代のための社会をめざす」活動に参加するよう呼びかけたのでした。

国連の掲げた「高齢者のための五原則」は「自立（independence）・参加（participation）・ケア（care）・自己実現（self-fulfilment）・尊厳（dignity）」です。

当時わが国は国際的「高齢化マラソン」の先行国グループのなかで、アジア唯一のそれも際立ってスピード・ランナーとして注目されていました。国民の関心も広がって、総務庁をフォーカルポイント（窓口機関）として全国展開をしています。全国の自治体の関連事業は一〇八三件に及び、一〇月一日には東京都庁で記念式典が行われて、就任したばかりの石原慎太郎都知事があいさつをしています。民間団体を結集した高連協は「高齢者憲章」を起草し、九月一五日には東京・大隈講堂で、堀田力代表が報告をしています。憲章は以後の活動の指針となっています。

国際的にダントツで「高齢化」で先行するわが国は、それから二〇年、先進的な「高齢化対策」のモデル事例を期待されながら、「高齢社会対策」を自然渋滞させてきたのです。世界に先例がないゆえにわがこととして自立・参加して体現する「高年世代」が不在の時期には、対策構想（「高齢社会対策大綱」、一九九六年～）は準備したものの実質的な進展をみませんでした。国際的な指針としての「国連・高齢者五原則」のうち、実感できているのはわずかに「ケア」だけというのが実情なのです。

**４　「高齢者対策」と「高齢社会対策」**（政策）

わが国は「高齢化」が世界一という速さで進んで、六五歳以上の高齢者が人口に占める「高齢化率」が二八％を超えました。そこで「高齢化対策」というとき、急増する「支えられる高齢者」を対象にした「高齢者（ケア）対策」のほうはこの二〇年、財政上の負担に苦慮しながら暦年の予算を継いで、国際的レベルを保持してきました。

ところが一方で同時に急増している「支える側の高齢者」を対象にした「高齢社会（参加）対策」は、一九九六年に「高齢社会対策大綱」として閣議決定（橋本内閣）したものの実現に向かいませんでした。小泉内閣、野田内閣でも見直しは行われていますが、高齢化率七％ごとにといった実態からではなく、機械的に五年ごとの義務付け見直しですから、緊急性うんぬんもいわれて、際立った進展をみませんでした。

「高齢者（ケア）対策」だけでも国・自治体にとっては並大抵の事業ではなかったのですが、加えて「高年世代」の登場とともにこれまで延滞してきた「高齢社会（参加）対策」の課題が重なってきているのです。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

**高齢者を温存でなく軽視**

「高齢社会（参加）対策」は社会のしくみの変容にかかわりますから、自治体によって事情が異なりますが、それゆえに独自の対策が可能であり必要になります。

　地域で増えつづける元気な高齢者のみなさんが参加しないでいては「少子高齢化」の進行とともに地域活動は萎縮するばかり。多様性（ダイバーシティ）がいわれて女性は八面六臂の活躍ですが、一方で高齢者は「毎日が日曜日」と揶揄されています。自治体の独自の「高齢社会（参加）対策」によって、「労働力減少」ではなく「労働力変容」を成し遂げることができて持続可能な地方経済の伸長が見込まれるのです。

「高齢者（ケア）対策」と「高齢社会（参加）対策」は両翼なのですが、この二〇年は「高齢者（ケア）対策」のみの片肺飛行がつづいているのです。若者と女性の活動による“経済成長”のみに期待し、地域で暮らす元気な高年者のもつ“成熟＋円熟力”による“経済伸長”を軽視してきたのです。功労者である高齢者を温存するところが軽視しつづけることになった政策によって、高齢者は世情の逆風にさらされる状態になっているのです。

かつてみんなが豊かになることをめざした「一億総中流」のために、個人的な預金にまわさず貯蓄ゼロをいとわなかった推進者（中小規模の企業主には借入が残る）が高齢期になって「下流老人」と呼ばれたりしています。社会の内部に亀裂がおこり、「格差」が生じているのです。

**５　犍陀多（カンダタ）の話**（格差）

芥川龍之介の『蜘蛛の糸』は一九一八年・大正七年の作品ですから一世紀前のことになります。子ども向けの雑誌『赤い鳥』の創刊号に書いた童話で、お釈迦さまがおいでになる極楽とその対極である地獄との間で、一筋の蜘蛛の糸にすがっている犍陀多が主人公です。もちろん天上が極楽ですから、蜘蛛の糸は極楽から地獄へと垂れていて、犍陀多はその糸にすがって極楽へとむかう途中にいます。

本人は覚えていないのですが、悪党だった犍陀多がかつて一匹の蜘蛛を踏みつぶさずに助けてやったことがあって、そのことからお釈迦さまは仏界から一本の蜘蛛の糸を下ろして、地獄であえいでいた犍陀多を救ってやろうというのです。上へいけば極楽へたどりつき、落ちればまた地獄という中間で、犍陀多が下をみると、蜘蛛の糸にすがって蟻のように後から後から罪びとたちが昇ってきます。

極楽へつながるのは一筋の細い蜘蛛の糸。たくさんの人がぶらさがっては重さに耐えきれずに糸は切れてしまう。悪党ですからとっさに自分の下で糸を切ることくらい思いついたとしても不思議ではないのですが、作家は犍陀多にそんなことをさせるいとまを与えません。犍陀多は地獄に落ちていくことになります。

じつは芥川のこの『蜘蛛の糸』の話には元ネタがあって、鈴木大拙が訳したポール・ケーラス著『カルマ（因果の小車）』からモチーフを得ているのです。やはり仏陀に「この糸を便りて昇り来たれ」といわれて、犍陀多は極楽へとむかいます。が、同じように後から後から糸にすがって昇ってくる人びとに気づいて、「去れ去れ、この糸はわがものなり」と絶叫するところで糸が切れて地獄へ落ちていきます。

「自分だけは」と願ったゆえに地獄へ落ちていく犍陀多を見る大拙と龍之介とが感じていたところは同じではないでしょう。大拙が関心を持つのはひとりの凡夫としての犍陀多の心の動きであり、芥川が「極楽と地獄」という対極を明確に示したのは、おそらくは当時、鋭敏な作家の眼前で広がりつつあった「格差」を表現したかったからにちがいないからです。

**６　「平和と平等」から「軍事と格差」へ**（歴史）

極楽は『蜘蛛の糸』で芥川が表現するように、単調でつまらなそうに思えます。自分を理解してくれるような仲間はいなそうで。地獄から極楽までたどる途中に他に何か別の世界があるはずで、できることならそこで下からくる連中に糸をくれてやって塗中下車してもいいと思った人もあることでしょう。

そののち「天災＝地獄」である関東大震災（一九二三年・大正一二年）に遭遇して、芥川は東京下町のふるさとが焼尽する「地獄」をみ、「唯ぼんやりした不安」に襲われます。のちの時代の「人禍＝地獄」となる「大東亜戦争」（日中戦争・太平洋戦争）がどこまで予見されていたかは知れませんが、「唯ぼんやりした不安」に襲われたまま一九二七年・昭和二年七月に自死してしまいます。犍陀多の糸を切ったのです。将来に自分が生ききれない時代を予見していたことは確かです。

いままた「二〇一一・三・一一 東日本大震災」の後遺症が癒えない世の中に、「平等」よりさまざまな「格差」が露出するなかで「平和」を危うくする自衛隊の中東派遣、日米同盟強化など「軍事」が動く気配があります。信頼するにほど遠い政治指導者。それを感じて「将来の不安」に襲われている多くの国民。

「平和と平等」という大戦後七〇年余を支えてきた未来指向から「軍事と格差」を容認する風潮が広がっていく現実。衣装を替えて現れる国民の性向（悪癖）。

「自分だけはなんとか」と願いながら、極楽へゆくこともままならずに地獄に落ちていく現代の犍陀多。それでも自分の糸がいちばん遅くに切れることに一縷の望みをつないで。

「戦場」を体験した大正人。胸中に戦禍を収めて外界の「平和」を保った昭和人。「平和と軍事」という存在の多重性の間を行き来した平成人。そして胸中の「平和」を守るために外界に「軍隊」を要請する令和人。いままた「平和から戦争へ」そして「平等から格差へ」と時代の振り子が戻ってゆく気配。

人生に「一〇〇年」という長い期間を得ても、将来への「不安」を抱えて過ごさねばならないのは酷な話。そのなかで「自分だけはなんとか」という思いで暮らすのも罪な話。酷でもなく罪でもない穏当な人生を送るにはどうすればいいのでしょうか。

**７　後の世代に負債を残さない**（将来）

見出しとしては唐突すぎるので経済の欄では控えましたが、「一〇〇〇兆円超の国の負債を負う」というものです。まだ見ぬ子孫に大きな負債を残さないようにできるのは、「高齢化（長寿）社会」達成のプロセス以外にはないというものです。

三五八〇万人に達して「高年世代」を形成し、家計黒字（一四〇〇兆円超）の大半を有し、培った知識と技術を保ち、働く意欲を持っている高齢者は、いまある社会の隙間を埋めるようなしごとをしていないで、みずから新たな「社会の高齢化」を構想し実現すべきであること。高齢者がもつ潜在力によって時代の転回が可能な機が熟していると感じている人が数多く湧出している今がその好機であると、二〇年来仔細に観察してきた本稿がここに声高に訴えているのです。成熟力・円熟力を活かせる人びとの総力による「高齢化（長寿）社会」（三世代社会）の形成です。

暦年の政府の年度予算の立て方では何年かかっても負債は年々じわじわ増えるばかり。重圧になるような負債を負ってこの国に生まれてくる子どもはかわいそう。子どもが生めない責任は若い人にはありません。

ではだれがどうやって？

ここが発想の転回点です。

\* \* \* \* \* \* \* \* \* \* \*

**大地から湧き出るように**

一九九九年の「国際高齢者年」からこのかた二〇年、「高齢化（長寿）」の当事者である高齢者はどうしてきたのでしょうか。

　一九六一年にスタートした「国民皆保険」、二〇〇〇年にスタートした「介護保険」の充実、そして最近では自治体ごとに「地域包括支援センター」が設けられて、住民が高齢期を安心して暮らせる体制が形づくられてきました。

周りを見てわかるように、大方の高齢者は身の丈いっぱいの貯金と、ほどほどの退職金と、一〇〇年安心の年金の受給を得て、労苦しないですむ“余生”を過ごしてきたのではないでしょうか。繁栄の時代をこしらえてくれた先人（功労者）に対する後人の慰労の善意によって支えられて。

それゆえに現役の時に培った知識も技術も活かすことなしに。これが将来問題になるとは気づいても、世代交代の渦中にあった政界からはだれも言い出せないで推移してきたのです。

二〇年間に活用されずに先人の去世とともに失ってしまった知識や技術や経験や構想などの総体は、実に膨大なものとなっています。失った生命は二〇年のあいだに二三〇〇万人を数えます。

わかりやすくいえば、失ってしまったかけがえのない先人の潜在力は、この間の社会保障費を相殺し、国家の負債となっている一〇〇〇兆円超の過半の負担に堪えるほど膨大だったのです。

善意で始まったとはいえ、今までのような「余生」がいつまでも許されるほどに先人が蓄えてくれた国力に余裕があるわけではありません。その上に歴史に学ばず戦禍を知らない世代の政治リーダーは、先人がこしらえてくれた公的な基盤の上で、私的な仲間うちでサクラを見る会を催したり、中東へ自衛隊を送ったり、必要とあればお札を刷り増して戯れに興じているのです。先人が労苦して育てて実らせた果実を「秋収冬蔵」せずに、わがもの顔に消費しているようにしか思えないのです。

戦後の「平和と平等」の社会をこしらえてきて今なお勝れた知識と技術と見識をもつ高齢者が、みずからと後人のために、もうひとしごとをしてから去る覚悟をしなければならないようです。

活かせれば可能な潜在力によるモノやサービスや居場所やしくみづくり。成熟＋円熟期にある人びとが保っている生活感性に、知識・技術・資産・人脈を活かして地域生活圏での日々に新たな暮らし方を提供しみずからも実感して。

そういう自立した生き方が日本オリジナルの「高齢化（長寿）社会」を形成するプロセスの源泉であり、一人ひとつの泉眼なのです。内から湧き出る発想とその実現。それが見渡すかぎり水玉模様のように重なって広がって大地を覆いつくすとき、総体としての日本社会の「高齢化」が達成されることになります。上からではなく大地から湧き出るように。